

令和5年度 第3回宮城県産業教育審議会会議録

宮城県教育委員会

- I 日時** 令和6年2月6日(火)
午後2時から午後4時まで
- II 会場** 宮城県自治会館208会議室
仙台市青葉区上杉一丁目2番3号

III 次第

- 1 開 会
- 2 議 事
 - (1) これまでの審議内容
 - (2) 今後望まれる専門高校の学び
- 3 その他
 - (1) 次年度の審議会について
 - (2) 伊藤会長より
- 4 閉 会

【資料一覧】

- | | |
|-----|--------------------------------------------------|
| 資料1 | 産業教育振興法(抜粋)
産業教育審議会条例・産業教育審議会規則
情報公開条例(抜粋) |
| 資料2 | 産業教育審議会答申(概要) |
| 資料3 | これまでの審議内容 |
| 資料4 | 本県の地域連携の取組事例 |
| 資料5 | 「専門教育次世代人財育成プロジェクト」概要 |
| 資料6 | 令和5・6年度 宮城県産業教育審議会のスケジュール |
| 資料7 | 宮城県産業教育審議会 意見用紙 |

(進行)
事務局 佐々木

皆様、本日は御多用のところ、第3回宮城県産業教育審議会に御出席いただきましてありがとうございます。今年度の審議会は本日で最後となります。どうぞよろしくお願いいたします。

本日お配りしております資料は、資料1から7でございます。また、日程は配布しております次第のとおりでございます。終了時刻は午後4時を予定しておりますのでよろしくお願いいたします。

なお、本審議会は資料1にありますとおり情報公開条例19条により公開となりますのでよろしくお願いいたします。

改めまして、委員の皆様、本日は御多用のところ御出席いただきまして、大変ありがとうございます。

それでは、令和5年度第3回宮城県産業教育審議会を開催いたします。

事務局 関

委員の紹介をいたします。事務局の関でございます。よろしくお願いいたします。

本来であれば、ここで委員の皆様のお名前を読み上げさせていただくところですが、御紹介につきましては資料をもって代えさせていただきます。

なお、本日、今野薫委員、三浦弘子委員、佐藤千洋委員、山内明美委員、梅津理恵委員が御欠席でございます。よろしくお願いいたします。

事務局 佐々木

では、開会の挨拶を伊藤房雄会長よりお願いいたします。

会長 伊藤房雄

皆さんこんにちは。東北大学大学院農学研究科の伊藤でございます。開会にあたりまして、一言御挨拶を申し上げます。

今年は年明け早々、能登半島で大地震と津波といった激甚災害が起きる大変な幕開けになりました。13年前の東日本大震災を思い出し、心を痛めている方も多かったのではないかと推察しております。

いかに安全、安心に気を配りながら、地域の産業教育を時代に合った形で盛り立てていくか、そして基幹産業のみならず、その地域独自の伝統産業、地域文化に関わる若者を育てていくのかといったことを改めて、復興という言葉の中で、今思い知らされているところです。

さて、本審議会ですが、宮城県の産業教育の振興を図るため、教育委員会からの諮問に応じて産業教育全般について審議し、提言や答申という形でお応えするものです。

直近では令和4年5月に「今後の産業教育の在り方について」と題した答申を提出させていただきました。こういった役割を果たしている本審議会の意義は非常に大きいものと認識しております。今日の人手不足の深刻化と同時に、少子化が急速に進行しているといった現状が今浮き上がってきております。今年度はそういう状況の中で、少子化のもとでの専門高校、専門学科の在り方というテーマに基づいて、委員の皆様それぞれの専門性とお立場から御意見を頂戴してまいりました。本日はその3回目となります。皆様には、将来の産業を支える人材の育成の支援となるよう、それぞれ御専門の立場から忌憚のない、また建設的な御意見を頂戴できればと考えております。簡単ですが、私からの御挨拶とさせていただきます。どうぞ本日もよろしくお願いいたします。

事務局 佐々木

ありがとうございます。続きまして 佐々木 利佳子 副教育長より御挨拶をいただきます。

佐々木利佳子
副教育長

副教育長の佐々木と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。令和5年度第3回宮城県産業教育審議会の開催にあたりまして、一言御挨拶申し上げます。

委員の皆様におかれましては、御多用のところ、お集まりいただきましてありがとうございます。また、本県産業教育の充実・発展のために日頃より御理解・御協力を賜っていることに対しまして、重ねて感謝申し上げます。

前回の審議会では、委員の皆様には大河原産業高等学校まで足を伸ばしていただきました。充実した教育環境のもとで、各学科の繋がりを意識して、生徒一人一人が生き生きと学ぶ子供たちの姿や、地域との連携等に積極的に取り組む学校の教育方針など校長より説明させていただきました。

私は前回、参加しておりませんので、議事録を拝見させていただきました。委員の皆様からの御意見や御質問により、大河原産業高校の教育活動を今後さらに充実させていくための視点を頂戴したように思っております。視察で御覧いただいたことを、ぜひ今後の協議の参考にしていただければと思います。

さて、各産業における人材不足や、技術承継の難しさなど、急激に進展する少子化に起因する諸課題については、御案内のとおりであり、産業構造の変化にも対応した地域産業を支える人材の育成は、喫緊の課題の一つとなっております。

県教育委員会といたしましては、令和4年5月に本審議会からいただいた答申に基づき、地域や産業界の御協力も得ながら、社会で活躍し、主体的に自己実現できる産業人材を育成するため、様々な施策を推進しているところです。

先月発表された「令和6年度宮城県公立高校入学者選抜に係る出願希望調査」においては、全日制高校の出願倍率が全体では1.00倍となりましたが、専門学科に注目しますと、軒並み1倍を割る状況でした。まさに、本審議会においてテーマとしている「少子化を踏まえた専門高校・専門学科の学びの在り方」が問われる状況となっております。

本日も限られた時間ではございますが、委員の皆様には、これら専門高校を希望している生徒たちのため、また本県産業教育の一層の充実のため、様々な角度から忌憚のない御意見をいただきますようお願い申し上げます。開会にあたっての挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

事務局 佐々木

ありがとうございます。ここで教育委員会の主な出席者を紹介させていただきます。宮城県教育委員会副教育長 佐々木 利佳子 でございます。宮城県教育庁高校教育課総括課長補佐 伊藤 大輔 でございます。

それではここから審議に入ります。産業教育審議会規則第5条に基づき、伊藤房雄会長に議長をお願いいたします。よろしくお願ひいたします。

議長 伊藤会長

それではここから暫時の間、議長を務めさせていただきます。皆さんの御協力をよろしくお願ひいたします。次第にありますが、本日の議事は2つございます。皆さんから多くの御意見をいただきたく思います。

それでは議事の1つ目のこれまでの審議内容から進めさせていただきます。まずは事務局から資料説明をお願いいたします。

事務局 関

では、まず〈資料2〉は答申の概要版、〈資料3〉はこれまでに委員の皆様から頂戴した御意見を、カテゴリーを立ててまとめたものです。〈資料2〉は本審議会の議事用にマーカーを付した再編集版となっております。〈資料3〉のこれまでの審議内容のマーカー部分と色を合わせております。

この審議会における御意見を1枚にまとめたものが〈資料3〉です。いただいた御意見を大きく4つのカテゴリーに分け、色別にまとめております。

1つ目の「①魅力発信」については、小中学生への発信の大切さであり、近い将来まで見通せるような発信、例えば採用の様子を伝えてはどうかという御意見、御提案もあり、答申をより具体的に落とし込んだ提案をいただきました。教科

によっては、例えば農業であれば環境教育や木育、サステナビリティ教育のように転換し、小中学生へ発信していけばいいのではないかというアイデア、それから中学生と協働して少し先の将来まで見通せるような魅力発信をしたらどうか、また、就職の採用の様子を伝えてはどうかという御意見を頂戴しております。

さらに魅力発信について新たに付け加えられる御提案がありましたら、後ほどお願いいたします。

次に「②学校資源活用・学校間連携」ですが、部分的な単位認定や上級学校との科目連携、専門高校同士の連携という御意見をいただいております。

ここにまとめましたとおり、移住者であるとか、海外からの留学生、リカレント教育というような部分的な単位認定を目指してはどうか。それから、上級学校と科目連携をしてはどうかという御意見もございました。

また、大河原産業高校の校長からのお話でございましたが、農業高校同士が連携して、畜産やその周辺の学びなど自校にない専門の学びを希望する生徒の受入や専門の学びの体験ができる可能性があるのではないかという御意見、また、いずれ地域商社となるような学科間連携ができるのではないか、それから学科間連の連携を経る中で、循環型のビジネスが考えられるのではないかということで、まとめの御意見としては、立地条件によっては専門高校が活況となるモデル校になり得るのではという御意見を頂戴しております。

「③地域協働について」です。地域アドバイザーを活用する、それから考える能力の育成、また、経営戦略など広い視野で学ぶ機会として活用してはどうかという学びの御提案がされております。

木育や環境教育、サステナビリティというのが地域づくりに貢献できるという御意見を頂戴いたしました。

まとめとして、地域が若者の活躍の場となれば、ファミリー層の移住も期待できるのではないかという御意見も頂戴しております。

「④今後望まれる人材育成のための学び」としては、結果的に人材育成となるような御意見をいただきました。机上の空論とならないようなビジネスマインドが必要であるということや、起業に繋がる学びを確保するというようなところ、専門高校の基本として技術の継承が必要だという御意見を頂戴しております。

ここまでのところで、御質問等ありましたらお願いしたいと思います。

議長 伊藤会長

ありがとうございました。それでは今、事務局から説明いただいた〈資料2〉と〈資料3〉について、特に〈資料3〉に基づいてコンパクトに説明していただきましたが、この内容について皆さんから確認したい点や御質問ないしは新たな意見等がありましたら発言していただければと思います。いかがでしょうか。

半沢委員

前回は所用があり、参加できなく申し訳ありませんでした。お伺いしたいのは、1回目の審議会で魅力発信に関して、高校卒業後の進路を含めて発信できればより具体性が増すのではというお話を申し上げました。その関連ということではないのですが、今後どのような課程、学校を優先していくのかということを考えるにあたって、実際の進路はどうなっているのか、あるいはその求人がどうなのかというデータがあると考えやすいのではないかと感じていますが、いかがでしょうか。

議長 伊藤会長

では、事務局から回答できる範囲でお願いします。

事務局 関

ありがとうございます。就職内定状況について補足させていただきたいと思います。

事務局 佐々木

はい、内定状況については、毎月、内定率等を算出させていただいております。最新のデータは12月末現在になりますが、内定率が県内で92.5%となっております。前年同月では、91.7%でございましたので今年度は昨年同期よりも0.8ポイント上回る内定率となっております。

専門学科では、農業が96.0%、工業が97.1%、商業が97.1%、水産が97.0%、家庭が85.0%、福祉が82.1%となっております。ちなみに普通科は87.9%です。

議長 伊藤会長

半沢委員の御意見は、今の内定率もですが、多様な進路情報が提示された方が議論はしやすいのではという話だと思います。おそらく、今日の時点では準備できない情報が多くあると思います。例えば、卒業した生徒が県内にいるのか、最初は県外に出ているのかという情報や、数年前の審議会でも話題になったと思いますが、5年ぐらいでどの程度転職しているのか、どの程度県内に戻ってきているのか、そこまでは追えなかったと記憶しているのですが、各高校から提供していただいている情報を元に、実際に宮城県の産業高校で学んだ後、どういう成長ないしはキャリア形成されているのか、そこを踏まえながら、将来を色々考えさせていただきたいというリクエストだったと思いますが、それでよろしいですか。

できたら、次回までに提示できる範囲で結構ですので、その素材を準備していただければと思います。今日の時点でいくつかの項目を述べましたが、委員の皆さんからこういうデータあると見えやすいというのをファックスやメールで伝えていただいて、事務局でそれに対応できるようなデータを整理して提示してもらおうということでいかがでしょうか。

ありがとうございます。他いかがでしょうか。

加藤委員

この内定率というのは、農業科だったら農業関連の就職が96%なのでしょうか。関連分野といいますか、同じ系統の分野の内定率でしょうか。それとも農業科で勉強をしたけれど、商業関連に就業したのも含まれているのでしょうか。

事務局 佐々木

そこにつきましては、今時点で示せる資料がありませんので、次回の審議会に準備できる範囲で提示させていただきたいと思います。

事務局 伊藤総括

今の件について確認ですが、農業科を卒業した生徒は農業関連の仕事に就いているかどうかではなく、農業科を卒業した生徒が就職しているかどうかという数字になります。農業科を卒業しても農業関連の就職とは限らないということです。

加藤委員

各分野では人材不足が深刻ですが、95%が同じ分野に就職していたら人材不足にはならないと思ったところでした。

議長 伊藤会長

確か前回か前々回の審議会において、有効求人倍率は、宮城県は確かもう2倍近かったと記憶しています。産業系高校などで見れば、4倍近いような状況で、ニーズはあると。しかし、マッチングでうまく希望するところに就職しているかどうかは、なんとも読みきれないということであったと思います。また、自分が希望したところで働き始めても、職場環境等が思っていたものと違っているとかで、退職や転職することもあるでしょうし、そういった細かいところを言い出すときりがありませんが、情報を出せる範囲で出してもらおうと、様々なことをまた考えやすくなりますので、よろしく願いいたします。

他に御意見、御質問ございますか。

後藤委員

関連付けて、〈資料3の①〉のところで、魅力発信についてというところですが、実際にどういう動機付けで、学校を選択したのかという最初のきっかけを把握しているかどうかということと、入学後どのように将来の進路が繋がったのかということについて、追跡が少しできるといいのではと思いました。1つ考える手段としては、〈資料2〉の第3章(4)のところで、グローバル化への対応と記載されていますが、実際にグローバル化というところにおいては、英語力の向上ということもあり、高校卒業後すぐに就職するのではなく、例えば進学や、または頑張っ海外に進出してみるということも考えられるのかと思いました。

入学の動機付けと、その後のところも合わせて何か情報があれば、ぜひ教えていただきたいと思います。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。後藤委員からの御質問ですが、〈資料2〉の第3章(4)グローバル化に関して、もう少し情報があれば提供していただきたいところですが、いかがでしょうか。

事務局 関

御質問ありがとうございます。グローバル化への対応の具体の事例については、今手持ちの資料がないようなので、これも後ほど回答させていただければと思います。

議長 伊藤会長

この間、事務局と少し事前レクで水産高校の実習船の話伺いました。長期航海でハワイ沖に向かい、漁業関係のスキルを身に付けているということでした。海外との接点ということはそういったところもありますし、松島高校の観光科は松島に来ている海外旅行客との何か接点もあるのだと思います。確認するとグローバル対応をしているのは、県内のいくつかの学科で取組としてはあるが、卒業した後、社会に出てもグローバル対応で継続できているのかどうかを整理してもらおうと考えやすくなると思います。ぜひ次回、また資料をお願いいたします。

事務局 伊藤総括

水産系高校の実習船宮城丸についてですが、これまでもハワイ県人会の方々との交流を行ってきていました。今後も現地での交流については検討しているところです。

また、高校のグローバル化ということで言いますと、普通科が中心になりますが、台湾との交流をこれまでおこなってまいりました。コロナウイルス感染症が第5類に移行したことを機に最近はまだ交流が盛んになってきていると思います。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。他いかがでしょうか。

高橋委員

確認したいことがありまして、資料に記載している「連携」と「協働」という言葉について、一緒に取り組んでいくという方針だと思いますが、これは連携というタイプと協働というタイプをパラレルで取り組んでいくという意味なのか、連携から協働に進化させるという意味なのか、そもそもどのような違いがあるのか教えていただければと思います。

私も農業高校と一緒に様々な取組をおこなっているのですが、どういうことが連携で、どういうことが協働なのかということについて、私の中でイメージが付かず、あえて使い分けているのかどうかを確認したいと思いました。お願いします。

事務局 関

御質問ありがとうございました。地域連携というのは、これまでも各校で実施してきたところですが、以前の産教審の中で、地域のお祭りなどに参加することで、若者が地域に根付き、活躍の場となることなど、少し先の未来のことを考えた連携のアイデアがあると思います。このようにそれぞれの立場の人たちが連携し、同じ目的に向かっての取組を協働と言えるのではないかと思い記載しています。

今現在、それぞれの学校で実施している連携というのを基本にしていきたいと考えています。

議長 伊藤会長

関連して御意見ないですか。

高橋委員

「連携」と「協働」を並べて表記していると、何がどう違うのかが分かりづらくなると思いますので、詳細に説明するなど、分かりやすくしていただくと良いと思います。

議長 伊藤会長

黒丸を取って、「連携及び協働」と表記するも良いかもしれません。

高橋委員

受け手が分かりやすいように表記していただくと助かります。

議長 伊藤会長

地域と産業界との連携という話の中で、例えば農業の学びを考えると、最先端のロボットトラクターなどは、この先5年、10年後は当たり前のように使っているだろうと思います。しかし、それを農業高校で準備し、生徒に使わせていくというのは、費用の面でも、操作するリスクの面からも簡単ではないと思います。そういった時に、例えばメーカーが提供していくということが連携だと思います。また、操作の仕方や機器を使用した実習の中で、メーカーの社員にレクチャーしてもらいようになれば協働という話になっていくのだと思います。それは農業だけではなく、商業や工業、福祉などにおいても最先端の機器等を用いて学び、それを使いこなせる人材を輩出していくという産業界との連携は必要だと思います。

また、学科間連携や学校間連携については、科目であったり、最新鋭の農業機械であったりを他の学校とも協働していきましようというやり方もあるかと思っています。

そういったことを概要版ではなく、本体の方に「例えば」という形で記載していくと分かりやすくなると思います。他いかがでしょうか。

後藤委員

まずは〈資料3〉の②ところで学科間の連携が記載されていることと、〈資料2〉の第3章の2(7)でも福祉に関する学びのところ、他職種協働の推進と記載があります。連携や協働について、WHOでも保健医療福祉の教育では専門職連携教育(IPE)ということが言われており、その教育スタイルは福祉と看護、地域の病院などとの連携を通して導入する流れになっています。

福祉の分野だと、例えば食事の問題や機器の問題などがあり、学科間の連携を具体的に進めるとき、カリキュラム等の課題があると推察されるのですが、カリキュラムの調整など実際に可能なのかということについて何か情報をいただければと思います。

事務局 関

ありがとうございます。他職種協働については、〈資料5〉の専門教育次世代人財育成プロジェクトでの実施を考えています。この事業については、後ほど説明させていただくということですのでよろしいでしょうか。

議長 伊藤会長

他いかがでしょう。まだあるかもしれませんが、今、事務局から説明がありましたように、次の議事の中でも関連することがありますので、とりあえずこの〈資料2〉と〈資料3〉については皆さんの了解、共通認識をしていただくというところでよろしいですか。ありがとうございます。

それでは議事の2に進んでいきたいと思います。「今後望まれる専門高校の学び」についてということで、こちらをまず事務局から説明お願いします。

事務局 関

議事2では、審議会の中で頂戴した御意見を軸にしつつ、もう少し③、④のところで「各教科に期待する地域連携」を深めていきたいと思っています。

再度〈資料2〉、〈資料3〉を御覧ください。これまでの議事答申において、審議時間は短いながら、幅広い議論がなされてきたことは、〈資料2〉の答申概要版、「これからの本県産業教育の在り方」においてマーカーを付した部分が広くあるところですので分かりやすいと思います。

繰り返しになりますが、少子化が急速に進んでいるからこそ、自分の学校、学科だけではなく、他学科、産業界、地域等が積極的に高校等との学びに関わり、学ぶ環境や機会を確保することは欠かせないと思います。

生徒にとっては十分に思考しながら学ぶ機会となり、また、産業界においては人材確保や連携、地域協働・地域活性化に繋がるという意味で、さまざまな期待がもてると考えます。

また、「第3期県立高等学校将来構想」においても、「地域等と連携した特色ある教育活動が求められている」とあり、魅力ある学校づくりの検討について言及しています。

ここで〈資料4〉を御覧ください。これは本県の専門高校で実際に行われている地域と学校が連携している事例の一部になります。どの専門高校も日頃からこのように近隣市町村、産業界、教育委員会等とさまざまな連携を組み、サービスや商品の提供、連携事業により、主体的・探究的活動、職業意識や起業家精神の醸成を行っています。

さらに〈資料5〉の事業「専門教育次世代人財プロジェクト」のポンチ絵を御覧ください。今年度、石巻をモデル地区に指定し、コンソーシアム（いしのまき専門教育人財パートナーシップ会議）を立ち上げ、スタートしました。これについては、事務局の都築より御説明いたします。

事務局 都築

事務局の都築です。どうぞよろしくお願ひいたします。専門教育次世代人財育成プロジェクトの事業説明をさせていただきます。資料はカラー刷りのもので〈資料5〉と記載しているものです。

本事業は、令和4年5月に本審議会からいただきました「これからの本県の産業教育の在り方」及び「今後のさらなる少子化を踏まえた産業教育の在り方について」の答申を受け、これからスタートする事業です。

専門学科同士、また専門高校同士の生徒が地域課題の解決に向けて連携した協働学習に取り組むことによって、新たな学びの形を実現するとともに、地域産業振興のため、関係機関とコンソーシアムを構築し、専門高校で学ぶ生徒の自発的な地域課題解決の学習を支援する事業としております。

モデル地区として石巻地区を選定し、独立した専門高校3校（商業、水産、工業）と農業・家庭系を含む総合学科1校で学ぶ生徒が、自分たちの学びや強みを持ち寄り、学校・学科の枠を超えた連携及び地域との連携を構築します。

このことにより、各校の学びを融合した新たな視点、新たな発想で、サービスや商品開発等、地域活性化に繋がる協働活動を生徒たちが行うことで、地域産業の振興を推進できる人材育成を目的としております。

地域関係機関には石巻専修大学や石巻市教育委員会、企業の方、東部地方振興事務所、NPO等の方に御協力をいただくことになっております。

また、コーディネーターを置き、学校や生徒、関係機関との連絡調整や円滑なコンソーシアムの運営に向けた役割を担っていただきます。

次年度から3年間、地域活性化のアイデアの提案、発表、実践や道の駅等をフィールドとした学びを展開するなど計画的に事業の推進を図ってまいります。

事務局 関

〈資料4〉及び〈資料5〉について、御説明をいたしました。少子化が進む中で学びの確保として、各御専門において考えられる「地域協働」の形について、より具体的なアイデアを率直にお聞かせ願えればと思います。よろしくお願いいたします。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。今、事務局から〈資料4〉と〈資料5〉に基づいて説明いただきました。特に〈資料5〉について、次年度から3年間取り組みたいということで、専門教育次世代人財育成プロジェクトと銘打った資料ですけども、この中で地域とのコンソーシアムを、コーディネーターを活用して構築し、様々な取組を展開しながら、その成果を社会にしっかり情報発信し、成果に基づいて学びを振り返る。そこから課題等が見えてくるとの意図があったと思います。そこで事務局からは、委員の皆さんに、御専門の立場から具体的にこの地域協働といったことについて、何かアイデアや御意見等があれば提供していただきたいということでした。

少し考える時間が必要だと思いますので、皆さんに考えていただいている間に、私からお話します。以前、高大接続について話をしたことがあります。産業高校の学びからさらに高度な知識や技能を習得する場合に、例えば農業の世界だと農業高校から農業大学校に接続することで5年間学ぶ時間ができます。そのため農業高校は3年間のカリキュラムで考えていますが、最初から高大接続で学びたいと希望する子供たちには、5年間のカリキュラムで様々な活動をしてもらうのもいいのではないかと様々な先生方にお話したら、その先生方が文科省に提案して、試行的なプロジェクトが採択されたことがあったように記憶しています。そういう柔軟なカリキュラム等が必要になってくるだろうと思っています。そこで、この次世代人財育成プロジェクトを考えると、あくまで産業高校だけで括るのではなく、各種専修学校とも一緒になって取り組んだりすることで、1年生、2年生の時に学びながら、自分の選んだ学びをさらに専門的に学びたいと考えたとき、特に学ぶ場所を考えたときに、それぞれの高校でも相談は聞いてくれるでしょうし、情報も提供してくれるのでしょけれども、こういったコンソーシアムと活動の成果を一同に会して発表し合う機会があると、自分たちの新たな発見や将来のキャリア形成の場にもなるのではないかと思います。

考える時間が2、3分しかなかったかと思いますが、いかがでしょうか。

半沢委員

3点ほどお話しさせていただきます。1つは、地域連携はどういう目的でされているのか。例えば、成功体験を積むとか、地域の文化、伝統、あるいは産業を知る等、さまざまな目的があると思いますが、第2回の審議会を欠席したので送っていただいた議事録を読ませていただいて、私自身の考え方としては、高橋委員がおっしゃっていたことがすごいピンとききました。連携していくということは、すごいパワーが必要だったり、考える力が必要だったりという御意見に同感し、専門高校に限らず、今の職業人、社会人に欠けているのではないかと思います。考え抜く、あるいは他の人とディスカッションする、協力を求めて汗をかくということが苦手なのではないかと感じています。しかもそれが20代に限らず、40代ぐらいの方でも欠けているのではないかと感じることもあります。そう考えると地域連携という中で、職業人としての基礎的な能力、考え

抜く、議論する、調整するという力を育むという視点で捉えると見方が違うのではないかと感じたのが1点目です。

2点目は、専門教育次世代人材育成プロジェクトにおいて、学校間連携あるいは学科間連携と聞いたとき、学校同士あるいは学科同士というイメージを持ちました。これは専門高校のそれぞれの課程を志望した生徒が、まだ具体的な進路が定まらない段階のときに、色々と学んでみたら、実はこっちの分野より興味がありそうだなと思ったら、それを後追いするような連携ができないだろうかと感じています。

これだけ専門の学校、課程があるので、IT技術等を使えば、自分が入った学校にいながら、もっと別の専門的な教育を受けることができないものかと思いました。もちろんスクーリングのようなものも必要でしょうけれども、せっかくなので、一人一人の進路希望に合わせた教育を本当にこう柔軟にできるということで、産業教育、職業教育の魅力を高められないものかなと感じています。

3点目として、1回目の審議会に出席した後、何人かの方とお話をさせていただいて、悩ましく思ったのは、規模は大きくない企業ですが、各地の大学と連携して、最先端の技術を磨いている会社が県内にもございます。その代表の方に、どのような学生に来てもらいたいのか質問をしたら、色が付いていない学生が良いという回答でした。最先端だけに、生半可な知識があると「これはできません」と言われるようです。とにかく無知であるからこそその強みということを代表の方は強調しておられていました。比較的、工業系の会社では、そういった御意見を聞くことが多いです。職業人として、社会人としての基本ができてれば、技術は会社で教えるとおっしゃいます。あまり色が付いていると困ると言われるところもあります。

しかし一方で、教育委員会としては、専門性を高めるところにやはり目が向くのも理解はできますので、それをどう合わせていったら良いのかを考えるときに、東北工業大学の方とお話をしたときに、地域からテーマを預けられて、学生を派遣するそうです。このときは市役所からのリクエストがあったということでしたが、市役所側の狙いは、そのテーマに対する明確な回答が欲しいということではなく、優秀な学生を掘り出すという狙いがあるらしいのです。高校において、そのようなことが可能かどうかは分かりませんが、ある程度、その進路を1つの方向へ、あるいは1つの業界、さらに言えば1つの企業に狙いを定めた生徒に、より深掘りして教育していくことが可能であれば、双方にとって良いのではと感じました。以上3点でございます。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。一人一人からの意見に回答していくと、大変かと思うので、後でまとめて答えていただこうと思います。続いて高橋委員お願いいたします。

高橋委員

はい、生徒の取組について2つ事例を紹介します。1つは、2、3年前に宮農高で、フリーズドライスープのオリジナルメニューのアイデアを競うコンテストがあり、そこにエントリーし優勝したことがありました。普通はそこで終わるのかなと思ったのですが、その商品化に向けたアプローチもされて、さらに一緒にお米を作っていました。それも作って終わるのかと思っていたら、それを地域の自動車ディーラーの、お正月のプレゼントとして提供していたようでした。地域の会社に出向き、高校生が作ったものとして交渉していたようでした。そういった展開をされながら、地域の方々に農業高校の存在意義や活動を伝えていきました。高校生は、このような活動ができると思ったでしょうし、おそらく活動を通して、様々な変化を感じとれた素晴らしい取組をみせてもらいましたし、当方にも報告していただきました。

もう1つは、まさに今取り組んでいる最中ですが、宮城県内の農業高校で石川

県の農業高校にパックご飯を届けたいという構想をもっています。農業高校は備蓄米を持っているらしいのですが、5俵しかなくパックご飯を製造するラインが作れません。そこで、私どものグループはパックご飯の工場を所有していますので、相談しに参りました。そこで千パック作れるような支援をしながらリクエストに応じていました。そこで、ただ届けるだけではなく、メッセージを添えて届けるという歯車を回しています。届ける算段については、運送会社と交渉していました。

このパワーはすごいと思っています。先生方がいろいろ仕掛けているとは思いますが、このような経験をした生徒は、次の場面で積極的に動けるだろうと感じました。

説明のあったコンソーシアムに馴染むかどうかは分かりませんが、素晴らしい取組だと思いましたので紹介いたしました。以上です。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。続いて加藤委員お願いいたします。

加藤委員

はい、地域協働の形ということで、何ができるかと考えていたのですが、この地区が石巻ということで、石巻が東日本大震災の被災地であり、そこに多くのNPO団体が入ってきていました。新しい人たちが入り、地域復興のために一生懸命に働いてくれた方々がいました。今もいらっしゃると思いますが、そういった方の助けを借りることもとても良いのではと思っていました。なぜなら、地元の人になかなか発見できなかったことを、外から入ってきた人が発見してくれるという部分もあると思うので、ぜひコンソーシアムの中に入れてもらうのが良いのではと感じていました。

それからもう1つは、私はホテル関係の専門学校なのですが、ホテル関係の人材養成となると、例えばサービスが上手にできるとは、一体どのような専門的な能力が必要になるのだろうかと感じる方もいらっしゃると思います。しかし、その一人一人の人間力というのが大変重要になってくるのですが、この専門学校のことから考えると例えば今、蛍光灯がありますが、蛍光灯というのは文字を綺麗に見るために作られている光です。しかし、レストランでは絶対にこの蛍光灯を使いません。レストランでは赤みかかった色を使用して、お肉や女性の口紅などを綺麗に見えるような色を使用しています。ホテルのほんの一部に関しても様々な技術が活かされているということは、例えば工業のことを勉強していたとしても、サービスのことに触れ合うことがあって、それをきっかけに何か新しいアイデアが出てきたり、興味を持って次に進むことができたりすることができるのではないかと思います。この学校間連携も全く違う分野が学びあうというのは意義があると思っておりました。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。続いて後藤委員お願いします。

後藤委員

はい、まずは先ほど半沢委員がおっしゃったことを踏まえて、地域連携、学校間連携、学科間連携について、どこに目標とか目的を設定するのが、大変重要になってくるかと思っています。

そういう中では、例えば「地域の何かを売るためには」と明確なものがしっかりとないと、ただ集まって販売するというようになってしまおうと思っています。先ほどIPEのことをお話させてもらったのは、保健医療福祉のところだと、それぞれの専門職がそれぞれの専門性を目指すところで、それぞれのバイアスが邪魔をして、自分たちが中心に動いてしまわないように、そこをまずは取り払うための教育が必要となっています。そのような意味では、何を目的なり目標にするための連携なのかを定めることが大切だと思います。学ぶというところでは、例えば、そこでの学び方や思考の作り方ということを踏まえると、先ほど高橋委員

からのお話で「生徒が交渉して」というところだと、〈資料5〉のところで、「道の駅等」と例としてありますが、では子供たちが場所をどこにしたらいいのかということも、自分たちで考えさせるようなことは必要だと思います。そもそも教育ですので、何を狙いとするかということで、少し生徒たちも考えて、場所も例ということではありますけれども、考えさせたら面白いと思っています。

私の方も福祉の分野で例えば、認知症基本法ができたので、社会に知ってもらうための取組を行っている、道路でチラシとかを配ることができなく、配るとなると警察に届けなければならなくなり、学生に配るにはどうするかと投げかけると、警察に届けを出そうとしたり、その範囲をどうするかと検討したり、様々なことを考えていく中で、実際に社会で活動するのはとても難しいということにも気づいていきます。そこで、人を動かすための戦略を考える力がすごく付いたと思うこともあります。

就職先も福祉関係ではない企業に就業する学生も多い中では、繰り返しになって申し訳ないですけども、半沢委員から言われた、「何のために」ということを踏まえて、そのデザインも考えさせていくことがとても良いのではと思いました。

ありがとうございます。続いて小嶋委員お願いします。

議長 伊藤会長

小嶋委員

はい、まずプロジェクトはコーディネーターの方に左右されるのではないかと思います。行政目線となりますが、地域の高校の出身者で、地域と積極的に繋いでいける方でないと難しいのかなと思いました。

また、地域の課題解決のプランというところは、先ほど高橋委員のお話しにもありましたが、まさに企業を動かすという形でも確かに解決はあるのかなと思ったのも1つですが、私、今年度委員をしていて、いろいろと考えるところがあり、以前、教育委員会にいたこともあります。結局、志教育を踏まえたときに、この産業教育をどのように進めていくのかというところが自分の中でも解決策がなく、例えば、本県の取組ということで多くの取組を実施していますし、各中学校と繋がって取り組んでいます。この右側の欄が実は大事であると思っています。右側の欄に何が入るのかを考えると、今年度、様々な宿泊事業者と話をしながら、松島高校の観光科を卒業したけれど、実はホテルなどの宿泊業者に就職しない、それは職業選択の自由はいいのだけれども、一方、先ほど加藤委員がおっしゃった通り、その離職率3年以内に3割弱となるので、私はその志教育の中で、産業教育をするというのは、それぞれの産業の特徴を知りつつも、常にその宮城に思いを馳せるとか、何かあったら宮城に帰ってくるとかということが大事なのかなと思っています。今年大河原産業高校を見ても思いますが、多くの方が地域と関わって、地域でその職業観の醸成というのもすでにやっていて、その深掘りについて、もう少しやり方があるのではと思っています。さらに、今回の入試の倍率で、宮城県農業高校がベスト5の中に2学科入っているということは、やはり農業を目指したい生徒は必ずいて、そこには熱心な先生がおり、2年連続で全国最優秀賞を取ったことによって、入学して学んでみたいという話があるのであれば、それは工業であったり、水産であったり、その情報の発信の仕方によっては、そこに行きたい生徒がいるのかと思っています。

あと各学校が特徴的なカリキュラムをやる中で、企業として即戦力が欲しい、先ほどの半沢委員の話では、そうではなく真っ白い方が欲しいということもありましたが、それは企業側の取捨選択になってくるのだと思いますが、生徒一人一人が最初に戻りますが、こういう授業を受けて良かったと思うところを突き詰めることが、すごく大事なのではないかと思います。

校長先生のところに会いに行くと、ある工業高校では生徒の3分の1が将来を見通せず、大学に進学しているという話がありました。そういう中で、生徒に

将来を見せるタイミングは様々あると思いますが、いろいろ知恵を絞りながら、地域の職業観の醸成をしっかりとやらないといけないのではと思いました。

志教育に戻りますが、私は小中学校の将来を考えると、気仙沼向洋高校など小学生と繋がって取り組んでいます。そういう取組というものを私たち経商部もですが、地元企業への関わり方は、実はまだまだあるのではなかと思うところがありました。

経商部も、それから農政部もそうですけど、庁内でいろいろ連携して、こういう機会を教育委員会だけではなく、生み出していくことが大事だと考えているところです。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。それでは徳能委員からお願いします。

徳能委員

はい、私も今話があった宮農高校の例というが、やはり産業教育を考える上では非常に参考になると思います。先ほど歯車が回るという話もありましたが、東日本大震災では宮農高校は大きな打撃を受けたことによって、人、モノ、お金等、多くのものが一気に投げられたと思っています。それが、10年間かけて良い方向に向いていったのではと私は思っていて、例えば、クボタとのご縁のお話などは、震災のところで様々な支援が入った中で、その流れの中での話だったりするのではないかと想像しています。

やはり短いスパンで物事を回していくということは難しいと思いますが、少しずつ取組をしていけば、いつか花が咲いて、それが延いては宮農高校の倍率を叩き出しており、決してみんな農業が嫌いなわけでもやりたくないわけでもなく、農業に魅力を感じるという中学生もたくさんいるということを実証してくれたのではないかなと思っています。

それからもう1つ、コンソーシアムについてですが、私も教育の中に身を置くものとして、取組としてはこうだなと思う一方で、このような取組は教育の中で行うものなのかなとも思っています。例えば部活など、放課後に自由な立場と自由な発想で、地域でお祭りをやろうとなり、そこに様々な学校から手伝いたいと集まって、実行委員会が組織され、その中で、私は今、食品関係のことを学んでいるからこのようなアイディアはどうかとか、工業高校ではこういうことをやっているけれども、どうだろうかということができることが一番理想的なものではないかとも思っています。学びというのは、やはり遊びが重要というか、その遊びの発想がないと、そこから学習に結び付いていくというのは、なかなか難しいと思っています。自分が、興味があって楽しくて、だから学びたいがその次にあるのかなと思います。あまり足かせをかけないで、このコンソーシアムの取組が、生徒たちの自由な発想をまとめ上げられるようなものになると良いのではと思います。なかなか難しいとは思いますが、部活のような発想で取り組めたらと思います。

最近の生徒たちは小学校でも中学校でも、もちろん高校でも探究的な学びを展開しています。だからこそ、自分で課題を見つけて、それを解決していくということを小さい頃から身に付きはじめているので、今までのようなものではなく、生徒が中心となり、生徒主体で動いていけるようなことはできるのではないかと思いますし、生徒の柔軟な発想は、私たちの凝り方、発想のはるか上にいるなどと思っています。生徒と廊下等でも話をしますが、「なるほどね」と思うことが随分あり、そういう生徒の発想を潰さないようにしなければならないと思っています。

もう1つ、東北六県の高校の校長先生方と話をすることがあり、宮城県は良いですねとよく言われます。やはり人口的にも、他のところに比べれば、生徒の数もあります。それから大学も企業もたくさんあって、その企業も世界と繋がっている企業が多くあるということで、宮城県の中には宝がたくさんあると思って

います。その宝を活かしていければこの産業教育というところの光が見えてくると思いますし、やはり活かさない手はないと思います。こんなに多くの大学があって、研究者の方がおり、大学生の先輩も多くいる環境を活用して、取り組めば成果が見えてくると思いました。

まとまらない話になってしまいましたが、私も、この審議会に出席するのは最後になりますので、思っていることを言わせていただきました。以上でございます。

議長 伊藤会長

ありがとうございました。最後に私からですが、皆さんのお話聞きながら、もう言うことがなくなりましたという思いです。

いま非常に重要なキーワードを徳能委員がおっしゃってくれたと思います。『遊び心』はとても大事です。それから、最初から枠を決めて〈資料5〉のプロジェクトを動かしていくと、疲れるだけの可能性も出てきます。その通りだと思います。しかし、徳能委員もおっしゃっていたように、このプロジェクトの意図する必要性はよくわかります。では、どのように動かしたらいいのかを考えると、今取り組まれているそれぞれの先生方の取組が、最後の道の駅を活用したところまでいけるのかどうかなど、棚卸しをしながら、農業や商業、工業等のそれぞれの分野の中で、括って取り組めるものがないだろうかと足元で見直し整理しておくことが必要ではないかと思えます。その上で大切なことは、コーディネーターの存在と役割です。地域づくりではコーディネーターの役割が重要であるとよく聞きますが、一番よろしくない例は、例えば首都圏から有名なコーディネーターに来てもらって、様々な国の補助金を使ってやりましょうという取組と思えます。積極的に動いてはくれるのですが、結局は、地域のことをよく分かっていなくて、報告書だけが積み上がっていく。そうならないようにするためには、農業版のプロジェクトであれば、そういうところに長けているOBの人にコーディネーターを担っていただくことでいいと思います。そのような方々に、現場で今動いていることを整理してもらいながら、例えば宮城の水産関係の高校では、先生たちの負担もあまり増やさないでできるようなこういったことに取り組んだら面白いのではとか、一方、生徒からすれば、まずやはり『遊び心』を大事にするように立て付けを考えてもらうことが大事で、その辺をコーディネーター役の人たちと、「何がいいですかね」と具体的に落とし込んでいくところに時間かけて検討していくのが必要だと思います。次年度の審議会では専門委員会を立ち上げて、それぞれ現場の先生方に具体の取組の検討をしてもらうと聞いておりますので、今お話したようなことを考えてもらえばいいのではと思えました。

その中で徐々にやることが見えてくるのですが、やはり『志教育』として、半沢委員がおっしゃっていた人間教育について考えていかなければと思います。実は大学生も本当にこのまま社会や会社の組織の中でやっていけるのだろうかと思うことがあります。すれ違っても挨拶もしないことがあります。でも懇親会になると一生懸命コミュニケーションを取ろうとしてくれます。しかしそうではなく、日常の生活の中で挨拶をするなど、そういったことが当然のようにできることが大切だと感じます。コミュニケーション能力とよく言いますが、苦手な子は苦手な子で当然ですが、挨拶したら返してくれるとか、そういったことが本当に今弱くなっていると感じます。しかし、義務教育やこういう産業教育、普通科の高校もですけど、そこで議論する話だろうかと思えます。やはり家庭内での教育が一番大事だと思いますが、親もそういう空気にすっかり馴染んでしまい、おそらく気づかないでいるのだらうと思えます。それをどうしたらいいのかと考えた際、簡単に教育カリキュラムの話ではないと思っていて、この審議会の中でもときどき「全寮制にしたらどうですか」という話をさせていただきました。おそらく本当に人間教育をやろうとすると、全寮制などの寄宿制が必要にな

ってくるのではないかと思っていたりしていました。

しかし、親の経済的負担だとか、親も子離れしないからなど様々な意見が出てくるのだと思いますが、逆に寄宿制についても、例えば産業界から支援してもらう仕掛けもしていかないと全人格的な教育は難しそうです。

寄宿制などの閉鎖的な空間だと違った問題も多く出るとは思いますが、しかし、15歳からは社会の当たり前のことを身に付けるというような教育観も必要ではないかと思っていました。

今日こちらに来る前に、学食で昼食を食べながら、午後からオンラインで秋田県の試験研究の話を聞いてコメントしなければならぬという同僚の話がありました。彼が秋田県サイドから言われているのは、人口が百万人を割り込んでしまった秋田県では高齢化率がひたすら上がっている現状で、どこでもそれは一緒なのですが、どうやったら若い人が地元に着住するのか、戻ってきてくれるのかという話で、いくらこういう魅力あるよという話をしても戻ってこないということで、やはり都会で生活し、都会で働くのと同じくらいの所得があるという事例を出してあげれば、少しは興味・関心を持って、都会から戻ってくる子はいるかもしれないし、あとは1回都会に行き行って働いて、ちゃんと戻ってことを考える子も増えるかもしれない。だからこそ、産業高校で半沢委員からも話があったキャリアパスが見えないといけないと考えますし、そこを見えるような形にしてあげるといいのではないかと思います。

当然、農村の人口も減っていく、生産年齢人口も減っていく。そういう中で、我々含めて、介護保険とか要介護状態が増えていったとき、誰が税金を納めて、様々なことを支えてくれるのだろうか考えると、本当に元気な若い人をどうやって今から宮城なり東北なりに定着する仕組みを整えていくのか、本当に重要で喫緊の課題だと思います。

そういったことも含めて、この〈資料5〉のプロジェクトは、こういう状況だからプロジェクトやりましょうというのではなく、考えはすごく良いと思うので、それを今動いている中で、何をこの取組の目的にするのか、それに合わせて現行の取り組んでいるものを組み合わせることで、過大な負担がなく実際にできるかどうかチェックすることが大切だと思います。

他にまだこの件で皆さんから言い忘れていたことなどありましたら、お願いします。

小嶋委員

1点よろしいですか。商工労働サイドからすると、子供たちが給与で企業を選ぶことが多いのですが、実際、日本の幸せ度ランキングは先進国の中で一番下です。その無形なところといいますか、今、委員長が述べられていた働きがいなども、地元にはあるというところの、教えというものも必要なのではと思っています。

あと先生方について、市町村職員もですが、通勤の方が多いのが現状です。その方々が勤務地のことを知っているかどうかといえば、すべてを知っているわけではないこともあり、転勤された先生方に、いかにその地域の企業も含めて、産業教育の観点から知っていただくかというところの工夫がもっとあればいいのかなど、我々のサイドからも考えなければならぬと思うのと、皆さんがおっしゃったように、結局、高校生が就職する際、親の意見は大きなものですので、親世代にも地域のことをどのように知ってもらうのかということも、いろいろ考えていかなければと思う部分はありました。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。他いかがでしょうか。

事務局で、今、皆さんから出していただいた御意見で、何か、特に質問ということはないと思うので、事務局サイトではこういったことを考えているのか、さらに御意見をいただきたいことがありましたら、お願いいたします。

事務局 関

はい、大変、含蓄が深く、また幅広い御意見を頂戴いたしまして、ありがとうございました。皆様方からの共通する御意見として、業種を超えたイノベーションやそれぞれの専門職が思い込んでいる価値観などを取り払って、連携していくことの必要性を委員の皆様から頂戴できたと思っております。

その中でも、目標や目的というのが大事であるということが繰り返し話題として上がっていたと思います。全人格的な成長を目指すための教育を進める必要もあるのだと改めて勉強になるところでございました。

本日につきましては、大変貴重な御意見を頂戴し、承ったというところで、本当にありがとうございました。

佐々木副教育長

今回の審議会は、高校教育課が持っておりますので、高校の学びというところですが、今、委員の皆様のお話を聞いておまして、私、義務教育籍でして、昨年度までは義務教育課におりまして、まさにその産業人材の育成ということで、いろいろ御意見を賜っていますが、人を育てているというところでは、産業だけではないというのは、本当に実感として感じた御意見でございました。徳能委員から『遊び』というお話がありました。まさに幼児教育は、遊びから学びが始まるわけですし、それを受け継いで小学校があって、そして先ほど志教育ということで何回かありましたが、やはり少し志教育についても小中学校の段階でやや固まってきてしまった感があります。

来年度から新たなフェーズの志教育ということで、まさに高校の探究的な学びに繋がっていくように、課題解決型で、しかも実践型の提言、提案で終わらずに、自分たちが考えたことをやってみるといってところまで繋がるような志教育を目指そうじゃないかというところで主務課の方では考えております。

10代は無力ではないと、10代でも社会が動かしていけるのだという気持ちを、私はいつも義務段階で経験させたその子たちが高校に行くときに、それこそ政治ではありませんが、そういったところに関心も行くでしょうし、そういった意味での義務教育段階の基礎的なところが非常に大事だと思っております。

そのような中で、農業への学びも決してみんな嫌なわけではなくて、今回の倍率が示している通り、その場でやってみたいと思う子たちがいるわけで、この勉強をやりたいと思った子たちが、やはり自分の興味・関心に従って学べてよかったと思えるような、そういった産業教育でありたいと思っております。

中には、もしかしたらマッチングで、こういうことではなかったなあと思う子もいますが、そういったところでまた別の展開ができるような柔軟性というのを、今日の審議会の中で1つのキーワードとしてあったかのように思っております。

できるかどうか分かりませんが、そういった柔軟な取組、柔軟にしなやかに生きていけるような、そういった子供たちの資質・能力を高めるためにも、システムそのものもそのようにありたいと思いつつ、今日皆様の御意見を伺ったところでした。本当にありがとうございました。

議長 伊藤会長

はい、事務局からよろしいでしょうか。総合学科の専門的な学びについては、前回の大河原産業高校の視察でも検討しました。そのときにも申し上げましたが、登米総合産業高校では学校運営に地域の様々な産業界の方々コーディネーターとして参画し、学校運営に様々な提言をしています。今日のこの資料に近い形で学校運営をされていることと思っておりますが、逆に様々な学科を産業高校に括ることのデメリットについて、何か感じていることとか、それらを乗り越えられる運営の仕方とか、今後の再編などについて、何かございますか。

事務局 関

話題の提供で、事務局から何かありますか。

ありがとうございます。業種を超えたイノベーションという話をした後に、少し聞きにくいなと思っていたところでしたが、前回視察させていただいた大河原産業高校の運営について、校長先生から例えば畜産の学びは、住宅街の中だと匂いや施設設備の難しさで持てないということでしたが、大河原産業高校には、学校林がありますし、さらに工業的な林産の施設、キノコの菌床栽培ができる施設があります。そういうできる、できないがある中でも、他校の生徒から林産を学びたいという思いを持つ生徒がいれば、そういう高校と連携をし、受け入れるというような仕組みを考えたらどうだろうかというお話が前回されたように思います。総合学科や総合産業高校の学びの在り方について、デメリットということで話をいただければ、これから事務局としても参考にさせていただきたいとします。

議長 伊藤会長

事務局から御意見を賜りたいということでしたが、皆さんどうでしょうか。

今の話だと様々な最新の設備が整っている高校もあれば、なかなか設備等を更新できない高校がある。時代や社会が変わってきていて、そこにある設備が使われないまま保有されている。そこで学んでいる子供たちからすれば、自分はこういうことをやりたいから、別の高校で学びたい内容の実習ができないだろうかとか、そういう声もおそらく出てくるだろうと。そういった問題をどう解決したらいいかというような話だと思います。

そこで1つ、大学だとよくサマースクールとか、ウィンタースクールとか、そういった時に1週間、様々な人たちを受け入れて、体験してもらうプログラムがあります。そういった中に海外から、特にアジア圏、中国からが多いかと思いますが、学生たちも受け入れようという話も出ています。

それによって東北大学の良さを分かってもらって、東北大学への受験や大学院への進学を考えてもらう機会になるように取り組んでいます。

例えば、新しくできた気仙沼向洋高校や宮農高校などへ、他の高校の生徒たちが2週間なりサマースクール的なプログラムに参加してみるという機会を考えてみるのも1つだと思います。需要があるかどうかと思いますが、そもそも設備があってサマースクール的な学びをやっているらしいという情報さえが伝わっていないこともあると思いますので、県内同じ情報がきちんと共有できていて、その中で取り組みたい生徒たちが出てくるかどうかということだろうと思いました。

何か御意見ありませんか。現場にいる徳能委員どうですか。

徳能委員

なかなか難しいなと思いますが、学校間で施設設備の差というものは、やはり大きくて、我々教員は分かっているけれども、生徒たちは他の学校でどのような施設設備があるかは分かりませんので、体験的に学べる機会というのがあれば、より学習を深めていくためには良いのかと思いました。

あとは、就業体験の活用の仕方を検討していく必要があると思います。それぞれの産業に生徒たちの目が向いていくためには専門高校だけでなく、実は宮城県の普通高校の生徒たちは就業体験がほとんどされていない状況であり、全国的にみても下の方に位置していると言われています。

職業高校の生徒たちの就業体験や中学生の就業体験というものは数多く行っているのですが、普通高校の生徒たちの就業体験というのは、実施していない現状があります。普通高校の生徒たちが専門高校に行って何かしらの体験をするという機会を作れば良いのではと思いますし、普通高校の生徒たちにも何かしらの道があればと思いました。

議長 伊藤会長

小嶋委員

ありがとうございました。皆さん、他に何かご意見ないでしょうか。

いいですか。この間、塩釜高校を訪問したのですが、塩釜高校の地元就職率がとても高く、定着率も高いということでした。どこに就職するかといったら、今、徳能委員と同じ話で水産加工会社とのことでした。

技術系の高校は、県外企業に就職する生徒が多いという話があり、そこは私もよく分かっておらず、実は普通科の高校ほど、地元への定着率がひよっとしたら高いのではないかと勝手な印象を抱いています。そのため今、就業体験の話なるほどと思って聞いていました。

議長 伊藤会長

他いかがでしょうか。関連して御意見あれば、お願いします。

半沢委員

総合産業高校のような学校ができた由来というのは、よく分からないのですが、例えば、少子化が進んで地域の学校の再編統合の中で生まれてきたとするならば、その学校の施設の整備の過程で、様々な資機材を充実する可能性があるのだと思います。何を言いたいかという、その学校の中で閉じないで欲しいと思います。せっかく最新の資機材なりを、この学校で収まるだろうという発想ではなくて、もっと様々なところの設備やカリキュラムを学べたら、生徒の選択肢が広がるのかなというように、知らないながらも聞きながら感じた次第でございます。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。ただ、それぞれ産業高校の中で、企業研修や実習に取り組んでいて、実習を受け入れてもらえれば、様々なことを学べるし、相手先も非常に良い受け入れ先というか安心して学生を送り出せるところといったところで連携していると思います。

そういう取組が増える時代だと思います。我々の研究関係でも、実は宮城県の農業関係の研究機関でも30代、40代の有望な若手が辞めて、国の試験研究機関に移っているとのことでした。なぜだろうかと考えると、国の方では今、試験研究の方針が変わり、少なくない数の若手研究者が辞めているようです。また、霞が関を見れば、有能な20代、30代が次々と辞めており、霞が関はブラックだということで若い人たちが入っていかないという現状があるようです。

これからは産業教育だけではなく、通常の高校もそうだと思いますが、すごい速度で働く機会が多様化し、働く機会も増えていくだろうとおもいます。そのような中で人間教育の話をしたのですが、いかに素直でいられるか、分からないことは教えてくださいと、こういうことを思っているのだけどどう思いますか、などといったことを面と向かって言ってくる若い人たちが本当に少なくなったと感じています。

色のない人を望む会社もあります。これまでは一定程度の知識と技能を持った若者を採用し、社内で専門的な知識や技能を習得してもらう人材育成が主流でした。そこでは、チャレンジして失敗したけど、もう1度チャレンジしたいのでなんとかできませんかという若い人が伸びていったと思います。そのような教育もどこかで取り入れていくことが必要だろうと思いました。

はい、時間も迫ってきましたので、皆さんから多くの有益な御意見いただいたことで「今後望まれる専門高校の学び」についてはよろしいでしょうか。

ありがとうございます。それでは、これで議事が終わりましたので、その他に移りたいと思います。その他は(1)次年度の審議会についてです。事務局から説明をお願いします。

事務局 関

はい、次年度につきましては、この審議会の下に、別の構成員による「専門委員会」を組織して、より各学科へ具体的な取組の提案ができるような議論を深め、

提言に盛り込みます。

その際のメンバー構成ですが、各学科の現場の先生方数名と産業界の方、また本審議会からも1名は専門委員に入っていただきたいと考えています。

（資料6）の通り、春までにメンバーを選定し、委嘱をしまして、6月から月に1度程度の開催を目指します。

また、親会の委員の皆様にも、何人か専門委員会に御参加いただければと考えております。本審議会が2回、専門委員会が4回、そこで話されたことをもとにして、令和7年3月を目標に提言をまとめていく予定です。

なお、本産業教育審議会及び、教育改革班で次年度立ち上げる「将来構想審議会」の提言や答申をもって、今後の高校教育の在り方を具体的に勧めていくこととなります。専門委員会のことでも、またお声がけさせていただくかもしれませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

この1年間慌ただしい日程ではございましたが、真摯な御審議ありがとうございました。

その他としてもう1つございます。本審議会会長の伊藤房雄先生は、今春で御勇退とのことです。長きにわたりまして本審議会で会長としてまとめてくださり、答申にも関わられたお一人です。また、徳能委員においても今審議会が最後となります。両名に一言お願いできればと思います。

徳能委員

多くの現場の声を聴いていただける機会をいただけたことに本当に感謝しかありません。私は家庭科が専門ですが、これからは生徒たちが誇りを持って学んでいけるような、そのような学科になっていって欲しいと思っていますので、今後もどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

会長 伊藤房雄

皆さん大変お世話になりました。3月で定年退職するということがあります。実はこの産業教育審議会に委員を10年勤めたこととなります。県の規定で10年を超えないという慣習もありますので、ここで任を解かしていただくことになりました。

10年前を思い出すと、産業教育について皆目分らない状態でした。はじめは震災後の産業教育の在り方についての検討でしたが、その前までにずいぶん詰めて検討されていたこともあり委員の皆さんがすごいことをたくさん考えていらっしやると感心した記憶があります。ただ、参加した1回目からもれなく会長ですと言われ、突然の司会で右も左も分からない中で、よくやってこられたと思います。それから今日までなんとかやってこられたのも、今日おいでの委員の皆様もそうですが、これまでの産業教育審議会に携わっていただいた様々な委員の方々から、それぞれの御専門の立場で本当に有益かつ前向きな御意見をいただけた賜物と思います。私はただそれを大雑把に風呂敷に包んで、こうですよねって言うぐらいで良かったのですが、そのような意味では、皆さんの御意見を伺って成長させてもらったのは私自身なのかなと思っています。

この場を借りて、委員の皆さんはじめ、これまで携わってくれた委員の皆様に改めて感謝を申し上げて私からのお礼のご挨拶とさせていただきます。

最後に、今後もこの産業教育審議会がますます盛会となり、また良い意見を事務局とやり取りしながら、宮城県の産業教育がさらにより良いものに発展していくことを祈念して終わらせていただきます。どうもありがとうございます。

事務局 佐々木

伊藤会長そして徳能委員、長きにわたり当審議会に御尽力いただきましたことに、心より感謝いたします。

それではその他、事務局から何点がございます。お願いします。

事務局 関

閉会の前に、本日の審議において、発言しきれなかったことやお気づきの点がございましたら、お配りしました意見用紙にご記入の上、2月16日までにファクシミリ又はメールでお送りいただきますよう、お願いいたします。

もう1点ございますが、お車でおいでになった委員につきましては、かねてお知らせの通り、大変お手数をおかけしますが、駐車料金の領収証を封書にて返送いただきますようお願いいたします。

事務局 佐々木

その他、何かございますか。ないようですので、閉会に移ります。

本日は、貴重な御意見をいただきましてありがとうございますございました。

以上をもちまして、令和5年度第3回宮城県産業教育審議会を閉じさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

